

小児科診療サポートレクチャー動画

小児の腹痛

2021年9月制作【上映時間:17分3秒】



ご講演

大塚診療所院長
順天堂大学医学部小児科客員准教授

大塚宜一（おおつか よしかず）先生

消化器症状には腹痛、嘔吐、下痢、下血などあるが、中でも腹痛は、最も頻繁に遭遇する症状の1つである。

「痛い」と訴えられるのは一般的には3歳以降、痛みの性状や正確な部位を説明できるのは6歳以降と考えられ、特に乳幼児の診察においては、不機嫌、哺乳不良、顔色不良、ぐったりしているなどの症状から消化器疾患を診断しなくてはならない。そのため、診察に際しては患児を「怖がらせない」ように、しかし、しっかりと所見をとることに努めたい。

笑顔が認められれば「まず心配ない」と判断できるが、普段以上に泣き叫んだり、元気がない、ぐったりしている、眠れないなどの所見は注意が必要である。

腹痛は、急性腹痛（腹症）と慢性腹痛に大別される。

急性腹症は急激に発症した激しい腹痛で、緊急手術を必要とする可能性が高い急病の総称で放置すると致命的に成り得る。年齢別には、新生児期は壊死性腸炎や中腸軸捻転、生後1から2か月では肥厚性幽門狭窄症、6か月から2歳頃は腸重積、幼児から学童では急性虫垂炎などが挙げられる一方、消化器以外が原因の精巣捻転や卵巣囊腫茎捻転などにも留意する。特に腸蠕動音の異常や腹膜刺激徴候を認めた際は外科的疾患を疑うが、IgA血管炎や糖尿病性ケトアシドーシスなどの内科的疾患も念頭に鑑別を進める必要がある。

慢性腹痛は「機能的または器質的疾患に基づき、長期にわたる間歇的、または持続的腹痛が3か月以上持続するもの」と定義されるが、臨床的には2週間以上持続した場合に慢性腹痛としていることが多い。

年齢が上がるにつれ機能的腹痛の頻度が増すが、慢性で反復する腹痛で、遷延する下痢・下血や体重減少を伴う場合はどの年代でも炎症性腸疾患や消化管アレルギーなどの器質的疾患に注意する必要がある。

疾患によって発症年齢分布に特徴があり、年代別に急性腹痛・慢性腹痛を来たす疾患を知っておくことが大切である。

演者紹介

大塚診療所院長
順天堂大学医学部小児科客員准教授

大塚宜一（おおつか よしかず）先生

【経歴】

1989年 順天堂大学医学部卒業、同小児科入局
1995年 学位取得
1997年 米国ハーバード大学研究生
1998年 英国ロンドン大学名誉講師
2003年 順天堂大学小児科講師
2008年 同先任准教授
2014年より同客員准教授および大塚診療所院長

【専門領域】

小児栄養・消化器病学、小児アレルギー学など

【研究テーマ】

消化管の粘膜免疫から見た食物アレルギーや慢性炎症性疾患について